



図 26.9 *Mycobacterium avium* 感染症



図 26.10 *Mycobacterium chelonae* 感染症

流に沿って生じる場合や全身播種される場合もある。

#### 病理所見

非特異的な炎症と類上皮細胞性肉芽腫との混在した所見を得る。抗酸菌の検出は病理組織学的に困難である。

#### 診断・鑑別診断

職業などが魚に関係している場合は本症を疑う。膿汁、皮膚組織、魚槽水を培養することで菌を検出する。鑑別診断にはスポロトリコーシスなどの深在性真菌症、皮膚結核、異物肉芽腫など。

#### 治療

テトラサイクリン系やニューキノロン系抗菌薬が有効だが、数か月～1年以上治療を継続する必要がある。外科的切除や、使い捨てカイロなどによる局所温熱療法(42℃, 1～2時間/日)も有効である。

## 2. *Mycobacterium avium* 感染症

四肢や殿部の外力の加わる部位に結節や膿瘍、潰瘍、皮下硬結をみる(図 26.9)。24時間風呂や温泉で感染することが多い。治療には、抗結核薬とマクロライド系やニューキノロン系抗菌薬を併用することが多い。限局した皮膚症状であれば外科的切除も有効である。

## 3. *Mycobacterium chelonae* 感染症

軽微な外傷から侵入して、顔面や四肢に丘疹や結節、冷膿瘍などを形成する(図 26.10)。免疫抑制や血液透析などを背景として生じることが多い。消毒不十分な医療機器を介して伝染することがある。刺青用のインクが汚染され、刺青施行部位に一致して発症することもある。

## 4. *Mycobacterium fortuitum* 感染症

皮疹は冷膿瘍や瘻孔、潰瘍、結節としてみられる(図 26.11)。抗結核薬に加えて、マクロライド系やニューキノロン系抗菌薬を用いるが治療抵抗性のことも多く、切開、排膿、切除も併用される。